



日文 701527822

181963

氏物語評釈

第十卷

橋姫
総角

椎本

玉上琢彌



角川書店

源氏物語評釈 第十卷
全十四卷



昭和四十二年十一月十五日 初版発行

定価 二〇〇〇円

著者 王^{たま}上^{がみ}琢^{たく}弥^や

発行者 角^{かく}川^{かわ}源^{げん}義^ぎ

印刷者 中^{なか}村^{むら}政^{まさ}二^に

製本者 鈴^{すず}木^き俊^{しゅん}一^{いち}

発行所 株式會社 角^{かく}川^{かわ}書^{しょ}店^{てん}

東京都千代田区富士見二ノ一三
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話東京 (265) 七二二一 (代表)

© T・Tamagami 1967

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替え致します

信教印刷・鈴木製本

目次

凡例

橋姫

一 不遇の古宮

そのころ、世にかずまへられたまはぬふる宮おはしけり

二 姫君二人を残し、北の方死去

年ごろふるに、御子ものしたまはで、心もとなりければ

三 宮、姫君を育てる

ありふるにつけても、いとはしたなく、たへがたきこと

四 姫君たちの成長

のちに生まれたまひし君をば、さぶらふ人々も

五 邸の荒廃

さすがに広くおもしろき宮の、池、山などのけしきばかり

六 宮、勤行に専念

かゝるほだしどもにかゝつらふだに、思ひのほかに

七 姫君二人の性格

御ねんずのひま／＼には、この君たちをもてあそび

八 春の一日、池の水鳥を見て、歌をよむ宮

春のうら／＼かなる日かげに、池の水鳥ともの

三

七

元

三

三

五

五

元

四

九 姫君たちも歌をよみ、琴を習う

姫君、御すよりをやをらひきよせて

十 宮の現状

ちゝみかどにも女御にも、とくおくれきこえまひて

十一 宮の素姓

源氏のおとどの御おとうとおはせしを

十二 宮邸焼亡、宇治に移る

かゝるほどに、住みたまふ宮やけにけり

十三 宇治の阿闍梨との交際

いとゞ、山かさなれる御すみかに

十四 あざり、冷泉院に八の宮のことを奏する

このあざりは、れぜいめんにもしたしくさぶらひて

十五 宮の姫君のうわさ

さすがにものねめづるあざりにて

十六 薫、あざりに紹介を求める

中将の君、なか／＼、みこの思ひすましたまへらむ

十七 あざり、院の使者と宮に参る

帝の御ことづてにて、あはれなる御住まひを

十八 あざり、薫のことを語る

あざり、中将の君の道心ふかげにものしたまふ、など

十九 八の宮と薫の文通

宮、世の中をかりそめのことと思ひとり

二十 薫、宇治をとく

げに聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまより

二十一 薫、八の宮に感服

されど、さる方を思ひ離るゝ願ひに、山ふかくたづね

二十二 院と薫、八の宮に好意をよせて三年 七

この君の、かくたふとがりきこえたまへれば

二十三 晩秋、八の宮、山の寺にこもる 七

秋のすあつかた、四季にあててしたまふ御念仏を

二十四 薫、宇治をとう 九

川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり

二十五 琴の声を聞く 八

近くなるほどに、そのことも聞きわかれぬ物のねども

二十六 宿直人、薫を案内する 八

しばし聞かまほしきに、しのびたまへど、御けはひしるく

二十七 薫、姫君たちを垣間見る 八

あなたにかよふべかめるすいがいの戸を、すこし押しあけて

二十八 姫君たち奥に入る 九

霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず、また月さし出でなむ

二十九 薫、姫君たちに挨拶 九

やをら出でて、きやうに、御くるまゐて参るべく、人走らせ

三十 大君と語る 九

若き人々の、なだらかにものきこゆべきもなく、きえかへり

三十一 老女の挨拶 九

たとしへなくさしすぎて、あなかたじけなや

三十二 老女の昔話 一〇

このおいびとは、うち泣きぬ

三十三 柏木の遺言 一〇

三条の宮にはべりし小侍従、はかなくなりはべりにける、と

三十四 薫、再会を約束 一〇

あやしく、ゆめがたり、かむなぎやうのものの、とはずがたりすらむ

三十五 薫と大君と歌の贈答 一〇九

みねの八重雲、思ひやるへだて多く、あはれなるに

三十六 薫、西面に行く 一二三

何ばかりをかしきふしは見えぬあたりなれど

三十七 朝の宇治川と薫の物思い 一二三

あじろは人さわがしげなり、されど氷魚もよらぬにやあらむ

三十八 薫と大君と消息の贈答 一二五

すより召して、あなたにきこえたまふ、橘姫の心をくみて高瀬さす

三十九 薫、帰京して、姫に文を贈る 一二八

老人のものがたり、心にかゝりておぼし出でらる、思ひしより

四十 薫、宇治の宮に物を贈る 一三〇

またの日、かの御てらにもたてまつりたまふ、山ごもりの僧ども

四十一 宿直人、薫の御衣に困惑 一三三

とのあ人、かの御ぬぎ捨ての、えんにいみじ狩りの御ぞども

四十二 宇治より薫に返事 一三三

君は、姫君の御かへりごと、いとめやすく、こめかしきを

四十三 薫、匂宮に語る 一三四

例の、さま／＼なる御ものがたり、きこえかはしたまふついでに

四十四 宮と薫の思わく 一二七

はて／＼は、まめだちていとねたく、おぼろけの人に心うつる

四十五 十月初、薫、宇治をとつ 一二六

十月になりて、五六日のほどに、宇治へまうでたまふ

四十六 八の宮、琴をひく 一二三

あけがた近くなりぬらむと思ふほどに、ありししのゝめ思ひいで

四十七 姫君たち、弹奏せず 一二三

このわたりに、おぼえなくて、折々はのめく箏のことの

四十八 八の宮、死後を薫に依頼

一三四

そのついでにも、かくあやしう世づかぬ思ひやりにて

四十九 弁の物語

一三五

さてあかつきがたの、宮の御おこなひしたまふほどに

五十 弁の苦心と喜び

一三六

さても、かくその世のこゝろ知りたる人も、残りたまへり

五十一 弁の半生談

一四〇

むなしうなりたまひしさわぎに、母にはべりし人は

五十二 反古の袋

一四三

よし、さらば、この昔ものがたりは尽きすべくなむあらぬ

五十三 薫、辞去

一四五

御かゆ、こはいひなど参りたまふ、きのふはいとまびなりし

五十四 薫、反古をよむ

一四六

歸りたまひて、まづ、この袋を見たまへば、唐の浮線綾を

五十五 薫、母宮をとう

一五一

かゝること世にまたあらむや、と、心ひとつに

椎本

一句宮、二月に初瀬参詣

一五五

きさらぎのはつかのほどに、兵部卿の宮、初瀬にまうでたまふ

二 夕霧右大臣の宇治の別邸

一五七

六条の院より伝はりて、右の大殿しりたまふ所は、河よりをちに

三 遊戯と音楽

一六〇

所につけて、御しつらひなど、をかしうしなして、碁、双六、彈碁の

四 対岸の八の宮、音楽をきく

例の、かう世離れたる所は、水の音ももてはやして、物の音すみまさる

一三

五 八の宮の思い

あはれに久しうなりにけりや、かやうの遊びなどもせで、あるにもあらで

一五

六 八の宮より薫への文に匂宮の返事

はる／＼と霞み渡れる空に、散る桜あれば今ひらけそむるなど

一六

七 薫、人々と八の宮邸に参上

中将は参うでたまふ、遊びに心入れたる君達さそひて、さしやり

一七

八 八の宮の欲待

所につけたるあるじ、いとをかしうしたまひて

一八

九 匂宮よりの文に、中の君の返事

かの宮は、まいてかやすき程ならぬ御身をさへ、ところせく思さるゝを

一九

十 匂宮、帰京

げに川風も心わかぬさまに、吹きかよふ物の音ども、おもしろく遊び

二〇

十一 匂宮の文に中の君時々返事

ものさわがしくて、思ふまゝにもえ言ひやらずなりにしを、あかず

二一

十二 八の宮、姫を思う

いつとなく心細き御ありさまに、春のつれ／＼は、いと暮しがたく

二二

十三 八の宮、死を思う

宮はおもくつゝしみたまふべき年なりけり、もの心細く思して

二三

十四 薫、中納言に昇進、柏木を思う

宰相の中将、その秋中納言になりたまひぬ、いと／＼にほひまさり

二四

十五 薫、七月、宇治に行く

宇治にまうでて久しうなりにけるを、思ひ出でて参りたまへり

二五

十六 八の宮の遺言

なからむ後、この君たちを、さるべきものたよりにもとふらひ

二六

十七 八の宮の思い出話

夜深き月のあきらかにさし出でて、山のは近きこゝちするに

十八 薫の望みに、八の宮、姫たちに琴をひかせる

すべてまことに、しか思ふたまへ捨てたるけにやはべらむ

十九 八の宮、仏間に入る

いとゞ、人のけはひも絶えて、あはれる空のけしき、所のさまに

二十 薫、弁と姫君と語る

こなたにて、かの問はず語りのふる人召し出でて

二十一 薫、匂宮、宇治訪問を予定

まだ夜深き程に歸りたまひぬ、心細く残りなげに思いたりし

二十二 八の宮、山寺にこもる、姫に教訓

秋深くなり行くまゝに、宮はいみじうもの心細くおぼえたまひければ

二十三 八の宮、名残を惜しむ

明日入りたまはむとの日は、例ならずこなたかなたたゝずみ

二十四 八の宮、侍女に訓戒

おとなびたる人々召し出でて、うしろやすく仕うまつれ

二十五 八の宮、邸を出る

まだ暁に出でたまふとても、こなたにわたりたまひて

二十六 八の宮、病氣

かの行ひたまふ三昧今日はてぬらむ、と、いつしかと

二十七 八月二十日ごろ、八の宮、死す

八月二十日の程なりけり、大方の空のけしきもいとどしき頃

二十八 姫君たち、あざりを恨む

阿闍梨、年ごろ契り置きたまひけるまゝに、後の御事も

二十九 薫、おどろく

中納言殿には、聞きたまひて、いとあへなく口惜しく、今ひとたび

一九

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二五

二七

二八

三三

三三

三六

三十 薫の弔問

阿闍梨のもとにも、君達の御とぶらひも、こまやかに聞えたまふ

二二七

三十一 九月、姫の悲しみ

明けぬ夜のこゝちながら、九月にもなりぬ、野山のけしき

二二九

三十二 匂宮の弔問

兵部卿の宮よりも、たび／＼とぶらひきこえたまふ

二三一

三十三 忌あけ、匂宮の文

御いみもはてぬ、限りあれば涙もひまもや、と思しやりて

二三三

三十四 姉君の返事

夕暮のほどより来ける御使、宵すこし過ぎてぞ来たる

二三六

三十五 匂宮の熱心さ

御使は、木幡の山の程も、雨もよにいとおそろしげなれど

二三七

三十六 早朝に匂宮の手紙

まだ朝霧深きあしたに、いそぎ起きて奉りたまふ

二四二

三十七 姫君返事せず

この宮などをば、かろらかにおしなべてのさまにも思ひきこえ

二四三

三十八 薫、宇治に来訪

中納言殿の御返りばかりは、かれよりもまめやかなるさま

二四四

三十九 姫君と贈答

御こゝちにも、さこそいへ、やう／＼心しづまりて

二四七

四十 弁の君と語る

ひきとよめなどすべき程にもあらねば、あかずあはれにおぼゆ

二五一

四十一 弁の君の素姓

この人は、かの大納言の御めのと子にて、父はこの姫君たちの

二五三

四十二 薫、八の宮をしのぶ

今は旅寝もすゑなるこゝちして、帰りたまふにも、これや

二五五

四十三 匂宮と姫君の考え 二五七

兵部卿の宮に對面したまふ時は、まづこの君達の御事を

四十四 姉妹の生活 二五九

さても、あきまじうて明け暮らさるゝは月日なりけり

四十五 年の暮れの宇治 二六一

雪あられ降りしく頃は、いづくもかくこそはある風の音なれど

四十六 宇治山のあざりととの交際 二六三

阿闍梨のむろより、炭などのやうの物奉るとて、年ごろに

四十七 暮れに薫、宇治に行く 二六六

中納言の君は、あたらしき年はふとしもえとぶらひきこえ

四十八 薫、姫君に匂宮のことを語る 二六八

宮のいとあやしきうらみたまふことはべるかな、あはれなりし

四十九 薫、思いをもらす 二七四

必ず御みづから聞しめし負ふべき事とも思ひたまへず

五十 薫、移転をすすめる 二七九

暮れはてなば、雪いと空もとちぬべうはべり、と、御供の人々

五十一 薫、宿直人と語る 二八〇

御くだものよしあるさまにてまゐり、御供の人々にも、さかな

五十二 八の宮の仏間を見る 二八二

おはしもし方あけさせたまへれば、ちりいたうつもりて

五十三 薫の莊園の者ども 二八四

日暮れぬれば、近き所々に、みさうなど仕うまつる人々に

五十四 新年に、あざり山菜を贈る 二八五

年かはりぬれば、空のけしきうらゝかなるに、みぎはの水とけ

五十五 薫と匂宮より新年の挨拶 二八七

中納言殿よりも宮よりも、折すぐさずとぶらひきこえたまふ

五十六 春、匂宮の文に中の宮返事する 二六八

花さかりの頃、宮かざしを思し出でて、そのをり見聞きたまひ 二六〇

五十七 匂宮と薫のやりあい 二五〇

御心にあまうたまひては、たゞ中納言を、とざまかうざまに責め 二五二

五十八 夕霧の六の君と匂宮 二五二

大殿の六の君を思し入れぬこと、なまうらめしげに、おとよも 二五四

五十九 三条の宮焼け、薫、宇治に無沙汰 二五五

その年三条の宮焼けて、入道の宮も六条の院にうつろひたまひ 二五七

六十 夏、薫、宇治にゆき、すき見する 二五九

その年、常よりも、暑さを人わぶるに、川づら涼しからむはや 二六一

六十一 中の宮の立ち姿 二六三

まつ一人たち出でて、几帳よりさしのぞきて、この御供の人々 二六五

六十二 姫君の用心ぶかさ 二六七

またあざり出でて、かの障子は、あらはにもこそあれ、と 二六九

総角

一 八の宮の一周忌の準備 二〇五

あまた年、耳なれたまひにし川風も、この秋はいとはしたなく 二〇七

二 薫、宇治に行く 二〇七

みづからももうでたまひて、今はとぬぎ捨てたまふ程の御とぶらひ 二〇九

三 薫と姫君と贈答 二一一

御願文つくり、経仏供養せらるべき心ばへなど、書き出で 二一三

四 薫、匂宮をすすめる 二一五

みづからの御うへは、かくそこはかたなくも消ちて恥づかしげ 二一七

五 薫、弁と語る

けさやかにおとなびても、いかでかはさかしがりたまはむ

六 薫、宇治に泊り、姫君と対面

今宵はとまりたまひて、物語などのどやかにきこえまほしくて

七 薫、母屋に入る

かく程もなき物のへだてばかりをさはりどころにて、おぼつかなく

八 姫君と薫の応酬

かく心細くあさましき御すみかに、すいたらむ人はさはりどころ

九 薫と姫君の思い

御かたはらなるみじかき几帳を、仏の御方にさしへだてて

十 薫と姫君と、朝の空を見る

はかなく明け方になりけり、御供の人々起きてこわづくり

十一 朝、薫と姫君と贈答

明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近うきこゆ

十二 姫宮、中の宮と結婚させようと思ふ

姫宮は、人の思ふらむ事のつゝましきに、とみにもうち臥され

十三 薫の移り香

例ならず人のさゝめきしけしきもあやし、と、この宮はおぼし

十四 八の宮の一周忌おわる

御服などはてて、脱ぎ捨てたまへるにつけても、かた時も

十五 八月に薫、宇治に行く、侍女の計画

かの人は、つゝみきこえたまひし藤の衣も、改めたまへらむ

十六 姫宮、中の宮に結婚をすすめる

姫宮そのけしきをば、深く見知りたまはねど、かくとり分きて

十七 姫宮の苦しみ

暮れ行くに、まらうどは帰りたまはず、姫宮いとむつかしとおぼす

三五

三五

三七

三〇

三三

三四

三五

三九

四一

四三

四五

四七

五〇

十八 薫の態度、老女の動き

まらうどは、かく顯証に、これかれにも口入れさせず、しのびやかに

十九 姫宮、弁に説く

姫宮おほしわづらひて、弁が参れるに宣たまふ

二十 弁の論

さのみこそは、さき／＼も御けしきを見たまふれば、いとよく

二十一 姉妹の交情

中の宮も、あいなく、いとはしき御けしきかな、と見たてまつり

二十二 薫、忍びこむ

弁は、宣たまひつるさまを、まらうどにきこゆ

二十三 姫宮、逃げる

宵すこし過ぐるほどに、風の音荒らかにうち吹くに

二十四 薫、中の宮と知る

中納言は、一人ふしたまへるを、心しけるにや、と、うれしくて

二十五 老女喜ぶ

老人どもは、しそしつ、と思ひて、中の宮いづこにかおはしますらむ

二十六 薫、ことなくて退室

あふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、程もなく明けぬるこゝち

二十七 姫宮、もどる

弁参りて、いとあやしく、中の宮はいづくにかおはしますらむ

二十八 薫、弁に恨みごとを言う

弁はあなたに参りて、あさましかりける御心強さを聞き

二十九 薫の文に、姫宮返歌

姫宮も、いかにしつることぞ、もしおろかなる心ものし

三十 薫の思案

身をわけてなど、ゆづりたまふけしきは度々見えしかど

三五三

三五四

三五六

三五九

三六〇

三六一

三六四

三六五

三六七

三六八

三六九

三七一

三七四

三十一 薫、匂宮に語る

三条の宮焼けにしのちは、六条の院にぞ移ろひたまへれば

三十二 匂宮、宇治への案内を頼む

あけぐれの程、あやにくに霧りわたりて、空のけはひ冷やか

三十三 薫、匂宮に中の宮を与える気

年頃かく宣たまへど、人の御ありさまを、うしろめたく思ひし

三十四 薫、匂宮と宇治に行く

廿八日、彼岸の果てにて、よき日なりければ、人知れず心づかひ

三十五 薫、弁に中の宮へ導けと言う

宮をば、御馬にて、暗き紛れにおはしませたまうて

三十六 薫、姫宮に対面

さなむ、と、きこゆれば、さればよ、思ひ移りにけり、と

三十七 薫、匂宮のことを言う

宮は、教へきこえつるまゝに、一夜の戸口によりて、扇を

三十八 姫宮許さず

今はいふかひなし、ことわりは、返す／＼きこえさせても

三十九 薫、むなしく退室

例の、明け行くけはひに、鐘の声などきこゆ、いぎたなくて

四十 薫と匂宮、帰京

暗き程に、と、いそぎ歸りたまふ、道の程も帰るさはいと

四十一 匂宮の後朝の文

宮はいつしかと御文たてまつりたまふ、山里には誰も／＼

四十二 第二夜、匂宮のさそいを薫ことわる

その夜も、かのしるべ誘ひたまへど、冷泉院に必ずさぶらふべき

四十三 姫宮の準備

いかゞはせむ、はいならざりし事とて、おろかにやは、と思ひ

三七

三七

三七

三八

三八

三八

三八

三七

三〇

三二

三五

三七

三八

四十四 姫宮、中の宮を教訓 三九

さうじみはわれにもあらぬさまにて、つくろはれたてまつり

四十五 匂宮と中の宮 四二

さる心もなく、あきれたまへりしけはひだに、なべてならず

四十六 三日の夜、姫宮の準備 四三

三日にあたる夜、餅なむ参る、と、人々のきこゆれば

四十七 薫の手紙と贈り物 四四

中納言殿より、よべ参らむとおもたまへしかど、宮づかへの労

四十八 姫宮の返歌 四七

こなたかなたゆかしげなき御事を、はづかしきいと見たまひて

四十九 匂宮、母中宮の注意を受ける 四八

宮はその夜内に参りたまひて、えまかでたまふまじげなるを

五十 薫、匂宮に宇治行きをすすめる 四九

そなたの心よせと思せば、例よりもうれしくて、いかゞすべき

五十一 中宮、薫に嘆く 四一

中宮の御方に参りたまへれば、宮は出でたまひぬなり

五十二 薫の思 四二

女一の宮も、かくぞおはしますべかめる、いかならむ折に

五十三 匂宮宇治に行く 四五

かしこには、中納言殿のこと／＼しげに言ひなしたまへりつるを

五十四 姫宮、容貌の衰えを嘆く 四六

さかり過ぎたるさまともに、あざやかなる花のいろ／＼

五十五 匂宮の約束 四八

宮は、ありがたかりつる御いとまの程をおぼしめぐらすに

五十六 匂宮、宇治の生活をあわれがる 四〇

明け行く程の空に、妻戸おしあけたまひて、もろともに